
海へ.....

sana

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海へ……

【Nコード】

N4482A

【作者名】

sana

【あらすじ】

海を舞台にした、ラブストーリー……。ふと海に行った^{コウ}晃と^{ルイ}瑠依の物語。二人の行き着く先には、何がある？

act・1 出会い

『全ての生命は海から生まれた』と聞いたことがある。

確かに海を眺めていると何故か安心する。

途切れることの無い波。ほのかにする潮の香り。ずっと見ても飽きることがない。

一人で見ている海と、二人で見る海は何かが違う。何が違うか、言えないけど違和感がある。

そして、今は一人。この間まで二人だったのに…なんでこんなに寂しいんだろう。一人でいることには慣れていたハズなのに。君が…琉依が居ないことで、こんなに寂しいなんて初めて知ったよ。

琉依と会ったのは、ここ…海だった。俺がふと海を見なくなり、砂浜で寝ていた。すると、いきなり犬が俺の腹の上に乗ってきた。

「は？何…この犬!？」

「すいませーん。犬、捕まえてもらえませんかー？」

遠くから女の声がした。言われた通りに、腹の上にいる犬を抱きかかえる。小型？中型？まあ、大型じゃないから良かった…。

犬を抱きかかえ、女がいる方へと俺は歩き出す。女は走っているみたいだ。

「すみません。ありがとうございます。」

「別にいいけど…。危ないよ、離しちゃ。」

でも犬は嫌いじゃないし、むしろ好きな方だし。なんて言うか目が

かわいんだよね。そして、犬の飼い主の女は首輪にリードをつける。それを確認した俺は、犬を砂浜に下ろした。

「じゃあ、俺はこれで…」

すると、犬が俺の足に飛びついてきた。尾を目一杯振っている。

「俺はこれでサヨナラだよ。」

犬の頭を撫でて、帰ろうとしたとき…また足に…。

「本当にすみません。さっきのお礼とお詫びと、言っちゃなんですが、あのお店に行きませんか？」

女が指をさした場所は、海岸沿いにある小さな喫茶店だった。

act 2・名前

「あんま持ち合わせてないですし…」

「あの店、父がやっているの。あたしの奢りです。」

「でも、悪いですよ…」

ただ海に來ただけだしさ…もう帰ろうと思ってたし。

「コーヒーだけでも…ってあたし、散歩しに來たんだ！どうしょ…。」

「

笑顔になったと思えば、いきなり悲しそうな顔して…。おもしろい女…。

「いいよ。俺、先行ってるからさ。後から來てよ。」

「はい！」

また笑顔になってる。やっぱりおもしろい女だわ。一緒にいたら、飽きないだろうな。

でも、こいつの犬は俺から離れようとしない…。俺、ここから動けないじゃん。どうしよう…。あ、いいこと思いついた！

「どうしよう…。」

女がつぶやく。俺はさっき思いついた事を話してみることにした。

「あのさ、俺も一緒に犬の散歩していいかな？離れてくれないし。」

「本当にすみません。良い案だと思いますよ！」

俺と女と犬で、この砂浜を海を見ながら散歩をすることになった。
犬と女に合わせるために、ゆっくりと歩く。こんなにゆっくりと歩いたのは久しぶりだ。

「名前は？」

俺がいきなり聞いたから、女はビックリした後 ゆっくりと口を開いた。

「^{スマイル} 董^{スミレ}って言います。」

「へえー、君の名前董^{スミレ}って言うんだ。」

「え？あ、私の名前は違います。董は、犬の名前なんですよ…。ごめんなさい。」

俺も明らかに悪いよな…。いきなり『名前は？』なんて聞いちゃったし。さっきから謝らせてばかりだしさ。きちんと聞かなきゃいけないよな。

「君の名前は？」

よし、きちんと聞いた。って、なんでこんな事で喜んでるんだ？まあ、いつか。君って呼ぶより、名前で呼びたいしね。

「瑠依って言います。」

瑠依：顔と合ってるじゃん。これでやっと名前で呼べると思ったら、スッキリするね。

a c t 3 ・ 年 齢

「あ、歳はいくつ？」

「まだ17歳です。」

「俺は20歳で、名前は昇^{ノボル}。」

「年上なんですね。」

あ、やべっ…気を遣わせちゃうかも…。でも年齢を誤魔化したくないしね。

「でも、よく未成年に見られるけどね。」

「私から見たら、同級生より十分大人っぽいですよ！」

「…ありがとう。」

久しぶりに？大人っぽいなんて言われた。大人っぽい…ってか、一応成人してるんですけど。まあ、いつか。

「いつもここ散歩してるの？」

「はい！」

まだ敬語使ってるし。いつになったら止めてくれるんだ？俺が年上だからか。友達と話してる感覚でいいのに。

「可愛いね、董。」

「うん。あたしが一目惚れして買った犬だからね。この毛の色も好き。だけど、一番愛くるしいのは目だね。」

おっと、犬の話をしたら敬語がなくなった。俺と同じこと行ってる

しね。この調子で話をしていこうと…。一緒に居て飽きないしね、瑠依は。でも、今日だけだよな。名前を知っていても、今日で最後だよな。

「もうそろそろで着くよ。」

「あそこだっけ？」

うる覚えで、瑠依が言っていた店を指さした。確か…あのレトロっぽい所でいいんだよな？

「そう、あそこだよ。」

すっかり馴染んでるね、敬語なしに。犬の董は瑠依の歩く速さに合わせていて、俺も二人の早さに合わせる。二人と一匹の間には、ゆつくりとした時間が流れる。太陽は沈みかけていて、空を紅く照らしている。

「寒くない？大丈夫？」

さっきまで暖かったのに、日が沈むにつれ砂の温度が下がっている。風も少し強くなってきた。すぐ帰るつもりで薄着で来たために、俺が少し寒かった。

「大丈夫。慣れてるから。」

店の近くには低い防波堤があり、その防波堤には砂浜とを行き来するための階段が付けられている。

瑠依は董を抱え、階段を登る。俺もそれに続いて登る。上がりきったと思ったら、少しまた降りる。すると、店の前で瑠依が待っている。

た。

「晃さん、先に入って。」

「瑠依はどこ行くの？」

とつさに名前を呼んでしまう。本当は『ちゃん』って付けようと思っていたのに。でも、瑠依は少し驚いた様子を見せたがすぐに答えた。

「裏から入って、董を家の中に置いてくるから、適当に座ってて。」

「おー、わかった。」

瑠依が裏に行ったのを確認すると、俺は店の中へ入った。

「いらっしやい。」

マスターがいた。瑠依の父親なんだろうか……。何処に座っていいのかわからなかったために、カウンターに座った。

「何にしますか？」

水の入ったコップを俺の前に差し出しながら、俺に聞いてきた。

「ホットコーヒーを。」

「わかりました。」

きちんと豆からひいてるみたいだ。瑠依が来ないために、俺は店の中をキョロキョロと見渡した。

「どうしましたか？」

マスターが俺に問う。

act 4・犬の毛

「え、いや…何でもないっす。」

怪しいと思われちゃったかな…。初めて入ったし、瑠依のお誘いだし断る理由もなかった…。

お店の雰囲気は、マスターの人柄がでている内装だった。

「晃さん、遅くなってごめんなさい！」

「ゆっくりでも良かったのに。」

瑠依が店の奥から飛び出てきた。肩で息をしている。

「こら、お客さんなんだぞ！」

「マスター、別に気にしてないんで。」

「っていうか、晃さんはあたしの客なの！お父さんは黙っててよ！」

少し怒り気味に言う瑠依。可愛いな、こんなくだらない事で怒って遅れただいたいの理由はわかるよ、その様子じゃ。

「董と遊んでたっしょ？」

少し笑いながら聞いた。だって、マスターに必死に抵抗？してるし…、笑うよ。

「なんでわかるの？」

やっぱ、おもしろいわ瑠依って。自分の服に毛付いてあるの、気付

いてないんだね。

「だって、服に董の毛付いてるもん。」

「あ、ホントだ。取ってくる！」

また店の奥に戻った。笑いを堪えきれずに吹き出してしまった。

「マジ笑うし！面白すぎだから！」

マスターは俺を見て笑っていた。そして、話かけてきた。

「瑠依の友だちかい？」

友だちなんだろうか…知り合い？さっき知り合ったばかり。なんと
言えばいいんだ？

「まあ、そんなところです。」

「良かった…。」

良かったって何？少しその言葉が気にかかった。

「お待たせ。」

10分ぐらいで帰ってきた。俺はマスターに入れてもらったコーヒ
ーに、砂糖を入れて混ぜながら答える。

「きちんと全部取った？」

そして、少しだけ口を含む。口の中には、コーヒーの苦みと砂糖の
甘い味が広がる。美味しいコーヒーだ…。

「取ってきた…はず。」

「うん、取れてるよ。」

笑顔になる瑠依。喜怒哀楽がハッキリしているよね。分かりやすく
て良いけど。

すると、俺の携帯が鳴る。電話の着信…彼女からだ。

act 5・カクテル

「ごめん。」

マスターと瑠依に断り、電話に出る。

『もしもし。』

『何時頃、帰ってくる?』

『…九時頃。』

『わかった。』

そして、電話を切る。あ…今日家に来るって言うてたんだっけ? いや、どうせ別れようって思ってたところだし。でも、帰らなきゃ後で説明するのも面倒だ…。早めに帰るか。

「早めに帰ってあげれば?」

瑠依が遠慮がちに言う。

「俺が好きで付いてきたんだし、大丈夫だよ。瑠依が気にすることないからさ。」

「そう?」

「うん。」

気にすんな…? 瑠依から誘ったのか? でも付いてきたのは、俺の意志だよ…。

「もう五時になるし、準備するよ。」

「うん。」

何かをしはじめた。メニュー表を変えている。

「何か手伝いましょうか？」

「君はお客さんだから。」

「じゃあ、何の準備をしているんですか？」

俺はごそごそと何かをしている、マスターに問いかける。マスターは手を動かしながらも、答えてくれた。

「6時からナイトタイムにするんだよ。家をたまり場にしないで来て飲むような店にしたいんだ。もちろん持ち込み有りだね。」

「利益が無いんじゃない？」

「いいんだ。お客さんの喜ぶ顔が見たいだけにはじめたようなものだし。」

すげえいい人だと思った。自分の方に利点が無くても、こうやって場所を提供するんだから。こんな良い店…ないよ。

「マスター、カクテル作れんすか？」

「少しならね。でも、オリジナルは作れないんだ。才能が無くて…。」

「俺、やりましようか？」

「作れるのかい？」

「はい！」

一応経験はあるんだよね。兄ちゃんが作れって。自分が店作ったからって、俺に頼まれても素人なのにさ…と思いつながら作りましたよ！そしたら、お客さんが“美味しい”って言ってくれたのが…今の彼女だっけ…。で、半年ぐらい作ってたんだよね。

「今日、試しに作ってみない？6時になったら、常連の子来るしね。」

「マスターが良いなら作りますよ。」

「つか、実は作りたいカクテルがあるから聞きました、なんて言えないよ。でもそれは内緒にしておこう。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4482a/>

海へ……

2011年1月21日02時20分発行